

平成21年(2009年)7月22日
山口県病害虫防除所

- 1 病害虫名 トルコギキョウえそ輪紋病
(病原ウイルス:アイリス輪紋ウイルス (Iris yellow spot virus: IYSV))
- 2 作物名 トルコギキョウ
- 3 特殊報の内容 新発生

4 発生経過

- (1) 発生確認月日: 平成21年7月7日
- (2) 発生地域: 下関市 宇部市 柳井市
- (3) 発生状況:

ア 下関市、宇部市、柳井市の施設栽培夏秋切りトルコギキョウにおいて、葉にえそ斑点やえそ輪紋を生じる障害が発生した。病徴からウイルスによる病害が疑われたため、病害虫防除所及び独立行政法人近畿中国四国農業研究センターで検定を行った結果、Iris yellow spot virus (IYSV) による「トルコギキョウえそ輪紋病」であることが明らかとなった。

イ 本ウイルスによる病害は、国内では平成8年に千葉県のアルストロメリアで発生したのが最初であり、現在では22都県においてトルコギキョウ、アルストロメリア、タマネギ、ネギ等で発生が確認されている。本県でのIYSVによる病害の発生はこれが初確認である。

5 本病の特徴

(1) 病徴

本病の病徴は葉の黄化、えそ斑点、えそ輪紋、不定形のえそ、茎のえそ条斑等である(図1、2、3)。株の萎縮や花卉のふ入り等を生じることもある。病徴から他のウイルスと区別することは困難である。



図1 株全体の被害状況



図2 葉の不定形のえそ症状
と茎のえそ条斑



図3 えそ輪紋症状

(2) 伝染経路

ネギアザミウマのみにより媒介され、その他のアザミウマによる媒介は確認されていない。幼虫時に感染植物の吸汁により本ウイルスを獲得し、一度ウイルスを獲得した個体は終生ウイルスを伝搬する（永続伝搬）。経卵伝染はしない。なお、土壌伝染及び種子伝染はなく、ほ場での接触伝染や汁液伝染の可能性は低いとされている。

(3) ウイルスの宿主範囲（感染が確認されている植物。海外の報告を含む）

リンドウ科：トルコギキョウ、アルストロメリア科：アルストロメリア、ユリ科：ネギ、タマネギ、テッポウユリ、ニラ、リーキ、バルビネ（ブルビネ）、ラッキョウ、ヒガンバナ科：アマリリス、ユーチャリス、クンシラン（クリビア）、アヤメ科：ダッチアイリス、ヒユ科：センニチコウ、アカザ科：ハウレンソウ

主な雑草：ジャノヒゲ、ナズナ、カタバミ、トキワハゼ、ホトケノザ、スベリヒユ

※アンダーラインは他県で被害が報告されている作物

(4) ネギアザミウマの生態

世界中に分布し、日本においても広く分布する。ネギ類の他、広範な植物に寄生・加害する。成虫の体長は1.1～1.6mm、体色は黄色のものから褐色のものまで変異が見られ、一般に夏期は淡色系、冬期は暗色系が多い。寄主植物の組織に産卵された卵は、20℃では20日、25℃では16～17日で成虫となり、年間10世代を経過する。主として成虫で越冬し、6～8月に発生最盛期を迎え、10月以降には密度が減少する。



図4 ネギアザミウマ成虫

6 防除対策

(1) 物理的および耕種的防除

- ア 発病株は伝染源となるので、見つけ次第すみやかに除去し、ビニール袋に密封して枯死させるなど適切に処分する。
- イ ほ場内および周辺の雑草はネギアザミウマの増殖源となるので、除草を徹底する。
- ウ ハウスの開口部に防虫ネット(0.4mm目以下)を設置し、ネギアザミウマの侵入を防ぐ。
- エ 青色の粘着トラップを設置するなどして、ネギアザミウマの発生動向を把握し、発生を確認した場合は直ちに薬剤防除を行う。

(2) 薬剤防除

- ア ネギアザミウマの防除を実施し、ハウス内での感染防止及びハウス外への拡散防止を図る。
- イ 花き類及びトルコギキョウでアザミウマ類に登録があるオルトラン（ジェイエース）剤、オンコル剤等の粒剤を定植時に施用し、ネギアザミウマの発生を抑制する。
- ウ アザミウマ類の発生を確認した場合は、ハチハチ剤、スカウト剤、マブリック剤、オルトラン（ジェイエース）剤、マラソン剤等で発生初期に防除する。
- エ 薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。